
巻頭言

特集 地域研究リテラシー：SFCにおける現在と展望

KEIO SFC JOURNAL Vol. 24 No. 2 特集編集委員

加茂 具樹

慶應義塾大学総合政策学部長 教授

正解のない、問いに満ちた予測不可能な世界と向き合う学生に、私たちはどのような教育と研究を施さなければならないのか。湘南藤沢キャンパス(SFC)が、創設以来、一貫して奉じてきた考え方が「多様性」である。

SFCは、創設以来の30年のあいだ、領域横断的で学際的な学問を追究して、学問的な多様性の維持に努めてきた。そうした教育と研究の環境は、学生が価値観の多様性に接する機会を提供し、未知の世界を歩み抜くために必要な知を生み出す知を育むことができ、と考えたのであろう。

「未来を切り拓くための政策」を考える学問である総合政策学が、多様性の学問であることを中心的価値に据えているのは、このためである。例えば、その姿は2023年3月に刊行したブックシリーズ「総合政策学をひらく」において観察することができる。同ブックシリーズは、SFCの総合政策学をかたちづくる学問領域を5つ(5巻)に整理してきた。すなわち「流動する世界秩序とグローバルガバナンス」、「言語文化とコミュニケーション」、「社会イノベーションの方法と実践」、「公共政策と変わる法制度」そして「総合政策学の方法論的展開」である。

そして総合政策学は、この政策を「人間が何らかの行動をするために選択し、決断すること」と捉え(加藤, 1989)、そして総合を「人間の行動が社会であり、その社会を分析する科学は、総合的判断に立脚しなければ成り立たない」と定義し(加藤・中村, 1994)、人間を考える学問として展開してきた。ブックシリーズ「総合政策学をひらく」の各巻の表紙に「人間」が描かれていることは偶然ではない。

総合政策学をこのように捉えたとき、本特集がテーマとして掲げた「地域研究」という学問は、SFCの教育研究の理念との親和性が高い。地域研究は、学際的、領域横断的なアプローチを特徴としているだけでなく、戦争と平和、世界の対立と協調、人々が求めるガバナンスをめぐる課題に取り組み、人間、生活、言語、文化に対する理解を深める礎となってきたといっよよいからである。進化し続ける世界と人類のダイナミックな相互作用を理解するための洞察を示す総合政策学と言っよよい。

本特集号は、SFCの地域研究の現在を総括し、その発展の方向性を展望するための手掛かりを示そうと試みた。これまで日本の地域研究は大学院を中心とした研究機関が主導してきた。しかしSFCが、学部レベルで政策研究を志向する教育研究機関として先駆的

な役割を担ってきたように、SFCの地域研究は、言語コミュニケーション教育との緊密な連携のもと、学部教育の重要な一部として位置付けられてきた。そうした意味において本特集号のねらいは、日本における地域研究の新たなフロンティアとしての役割を担ってきたSFCの現在を描き、地域研究の新たな展開の可能性を読者に提示することとも言ってもよい。

また本特集号は、SFCの教育研究の対外発信のかたちを再検討する試みの一翼を担っている。SFCは、領域横断的で、学際的な学問が展開しているがゆえに「分かりづらい」と指摘されてきた。本特集は、SFCの教育研究を体系化する取り組みでもある。本号の各論考の執筆者は、自らを地域研究領域の教育と研究をも担う研究者として自己認識している。本号の各論をつうじてSFCにひろがる多様な研究の一部を「地域研究」という学問として可視化することができる。

本特集号は2つの部によって構成されている。第1部は、SFCにおいて言語コミュニケーション教育を担っている教員による地域研究論が披露されている。第2部は、SFCにおいて地域研究領域の教育研究を担っている教員、またSFCにおいて学位を取得した研究者による地域研究論が示されている。そして本特集が、2023年度まで総合政策学部の教員としてSFCの地域研究の一翼を担っていた國枝美佳氏の寄稿を得たことは、存外の喜びである。本特集の読者は、SFCが地域研究という学問領域をどのように認識しているか、また地域研究について身に着けるべき資質や能力(地域研究のリテラシー)をどのように論じているか、そしてSFCにおける地域研究が言語コミュニケーション教育とシームレスに接続していることが、その教育研究の豊かさを支えている実態を理解することになる。

参考文献

- 加藤寛(1989)「未来は君たちのものです 慶應義塾SFCを志望する諸君へ」『慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス 総合政策学部 環境情報学部(1990年4月開設)』慶應義塾湘南藤沢新学部開設準備室。
加藤寛、中村まづる(1994)『総合政策学への招待』有斐閣。